

## 2025年度 健育会グループ医師研修会を開催しました

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



2025年11月29日(土)、ホテルニューオータニ芙蓉西の間にて「2025年度 健育会グループ医師研修会」が開催されました。全国から集まった健育会グループの医師に向け、私から来年度の課題の説明と、兵庫医科大学医学部リハビリテーション医学講座の主任教授、道免和久先生による特別講演が行われました。

研修会の冒頭では、まず私から、道免和久先生にご講演をお願いするに至った経緯と健育会グループが来年度に向けて掲げる目標と具体的な課題についての方向性を示す講話を行いました。



本日は、特別に慶應義塾大学医学部内科学(消化器)教室教授の金井隆典先生、慶應義塾常任理事・慶應義塾大学医学部外科学(一般・消化器)教室教授の北川雄光先生、そして順天堂静岡病院副院長の藤田和彦先生にご臨席いただいています。藤田先生は、来年から熱川温泉病院の院長にご就任いただくことが決まっています。

特別講演には、兵庫医科大学医学部リハビリテーション医学講座 主任教授の道免和久先生にご登壇いただきます。

お話をお願いしたいと思ったのは、道免先生のインタビュー記事を拝読し、大変感銘を受けたからです。特に、麻痺患者さんに対してCI療法を行っている背景や、リハビリテーション科医師のあるべき役割、そして何よりも先生ご自身のパーキンソン病との向き合い方に対する姿勢に、心を打たれました。その感動から、今回のご登壇をお願いしました。



先代である私の父は、今から60年前に熱川温泉病院を設立しました。当時はまだリハビリテーションという概念そのものがなく、温泉療法が主な治療でした。

その後、上田敏医師がリハビリテーションの概念を日本に取り入れられたことで、この分野は広く普及していきます。

当時のリハビリテーション医療の主流は、患者さんのADL向上を最優先とした「利き手変更」を行っていました。しかし、父は「麻痺によってわずかにでも指が動いているのなら、小指と親指を少しずつ動かせば脳は必ず活性化するはずだ。安易に利き手を変えるのはおかしい」と、当時の常識に異を唱えていました。

道免先生が推奨されているCI療法は、先代の父がまさに感じていた疑問を見事に払拭する、常識を覆す画期的な治療法です。

新しい療法であるがゆえに、世間からのバッシングもあったと聞きますが、そうした中でも果敢にチャレンジを続ける道免先生のご活躍と、父が残した言葉が私の心の中で深く重なり合い、ぜひ先生から直接、その信念に裏打ちされたお話を伺いたいと強く感じました。



道免先生は、リハビリテーションにおける医師の役割を「チーム医療の指揮者」だとおっしゃっています。これは、患者さんの筋力や病態、生活環境などをすべて把握し、ゴール達成のためにどのような治療が必要かを判断し、それをセラピストをはじめとするチーム全体に共有していく役割です。

本日お集まりの先生方の中には、リハビリテーション専門医の数は多くないかと思いますが、道免先生のような「チーム医療の指揮者」になるのは難しいかもしれません。

しかし、皆さんは患者さんを中心とした「医療チームのリーダー」になることは十分に可能です。

患者さんやご家族はもちろん、セラピストやナースも、医師である皆さんには大きな信頼を抱いています。医師という立場は、あらゆる角度から信頼されているということを、今一度、深く自覚していただきたいと思います。

たとえ専門外であったとしても、リハビリを行っている患者さんがいれば、セラピストと同じ言葉で対話し、患者さんが今どのような状況にあるのか、ご家族に医師の口からしっかりと説明できる存在になってください。

患者さんやご家族は、「セラピストだけでなく、先生もちゃんと見てくれているんだ」と安心し、その一つひとつの積み重ねが、揺るぎない信頼へとつながっていくはずです。

リハビリテーション医療が確立されていく中で、医師が患者さんと深く関わっている病院は、まだまだ少ないのが現状です。

だからこそ、皆さんが「医療チームのリーダー」として機能し始めることは、他の病院にはない大きな差別化につながります。これは、単なる医療の質の向上に留まらず、私たちのグループ全体の経営戦略にもなり得るのです。

皆さんには、患者さんが医師という存在に対し、ご自身が思っている以上に強く、深い信頼を抱いていることを改めて意識し、その期待に応える行動を心がけていただきたいと思います。





次に来年度の健育会グループの方針と、医師の皆さんに担っていただきたい役割についてお話しします。

健育会グループでは、医師の役割は「医療における倫理の番人」とであると、常々お伝えしています。これは、先生方それぞれの倫理観に反する医療行為は決して受け入れないという毅然とした姿勢で対応することを徹底してほしいということです。この軸は決してぶらさないでください。

私たち健育会グループは、すべての職員が「Our Team」の一員であるという自覚を持って日々取り組んでいます。

その中で、医師の皆さんは、今一度「医療チームのリーダー」とであるという意識をしっかりと確立してください。

周囲の期待に応えられるよう、高い倫理観をしっかりと持ち、たとえ専門外であったとしても患者さんの状態をしっかりと把握する、チームを牽引する姿勢が皆さんには強く求められています。

健育会グループでは「安全」「経営」「愛情を持って親身な対応」を大切にしています。

皆さんが目指すべきは、患者さんから最大限に信頼されるような対話ができる「Patient First」な振る舞いです。「Patient First」とは、常に患者さんの尊厳を考えるということです。治療によって命を救い、病気を治すことには全力を尽くし、それ以外の時間においては、どうすれば患者さんの尊厳をきちんと保てるかを考えて診療に当たってください。

「愛情を持って親身な対応」は、患者さんの幸せホルモンを出すことですが、幸せホルモンには主に3つの成分があります。

そのうちの2つ、ドーパミンやセロトニンは、主にナースやセラピストが、患者さんと丁寧な言葉で接したり、スキンシップを行ったりすることで生まれます。

それに対し、幸せホルモンの最後のひとつ、オキシトシンは、医師である皆さんが生み出すべきものです。

オキシトシンは、ただ病室で対話をしているだけでは生まれません。例えば、病室を後にするときに、再度自分の説明が理解されているかどうか患者さんの顔色や様子を伺ってから立ち去るといった、ささやかな振る舞いが重要です。

このような行動によって、患者さんは「この先生は、私のことをきちんと見てくれている」と感じ、心の底から安心し、オキシトシンを生み出します。

常に患者さんの病態を的確に把握し、その状態をご本人にもご家族にも、医師の口から自信を持って説明できるよう、全力を尽くしてください。その姿勢こそが、揺るぎない信頼を築く礎となります。

また、患者さん一人ひとりの気持ちに寄り添う上で、健育会グループは回復の見込みがない患者さんへ対する「出口のない延命措置」という重い問題にも踏み込んでいきます。

私たちは、ご本人の尊厳が最大限に尊重され、患者さんが苦しむことなく最期を迎えることができる治療のあり方を追求していきたいと考えています。

この実現のためには、皆さんと患者さん、そしてご家族との間に、強固な信頼関係がしっかりと構築されていることが不可欠です。

皆さんには、ご家族に誠意をもって提案できる医師になっていただきたいと思っています。そのためにも、日頃から患者さんを第一に思い、行動し、ご本人にもご家族にも心から信頼されるような医師を目指してください。



私の講話の後、道免和久先生による特別講演「リハビリテーション診療に携わる医師に必要な基礎、理論、考え方」が行われました。

今回の医師研修会では、湘南慶育病院の鈴木則宏院長に座長を務めていただきました。



道免先生のご講演では、リハビリテーション診療に携わる医師に不可欠な基礎知識、評価の重要性、そして医師の哲学についてが述べられました。



リハビリテーション科医師の役割を、野球における「監督」やオーケストラにおける「指揮者」に例えられ、単に処方箋を出すだけでなく、治療方針を決定し、チームを適切に導く役割を担うべき存在であると説明されました。

また、治療効果を安定させるためには機能評価といった数値が必要であると強調され、エビデンスを確立するための第一歩は、数値化から始まると述べられました。

医師として求められることは、患者さんがその後、どのような状態まで回復するかといった予後予測が重要であり、「予後予測は外れるためにある」という逆説的な考え方を示されました。予後予測値を超えるアウトカムを目指すこと、そして予測が外れた理由を徹底的に考察することが臨床効果の向上と医師自身の研鑽につながると述べられました。





CI療法の事例も動画と共に紹介されました。CI療法を取り入れる際に意識する点として「課題の段階付けを行い、難しすぎず、簡単すぎないことを繰り返し続けること」「様々なリハビリを試すこと」が挙げられました。



最後に、ご自身のパーキンソン病の当事者としての経験について、パーキンソン病は「不便だが不幸ではない」という言葉で現在の心境を表し、同じ病を抱えている俳優のマイケル・J・フォックスが大切にした、アメリカの神学者、ラインホルド・ニーバーの書いた「ニーバーの祈り」の一文が紹介されました。

その一文は、「治らない障害を受け入れる平静さと、改善できることに挑戦する勇気と、そしてその違いを見分ける知恵」を求めるものであると述べ、この知恵を与えるのが我々医療従事者の役割であると伝えられました。



「患者さんに対し、知恵と経験を持ち、当事者が何をしたいのかという希望を理解して、そこに寄り添いながら多様な選択肢を提示できるような医師になりたい」という熱い思いを語られました。

講演終了後には、道免先生を交え、健育会グループの職員による懇親会が催されました。

会の始まりに、慶應義塾常任理事の北川雄光先生より、健育会グループのますますの発展と、道免先生の更なる躍進を願った乾杯の挨拶をいただきました。





懇親会は終始和やかな雰囲気が進み、道免先生のご講演内容から、健育会グループの未来、医療人としての振る舞いや日々の業務に至るまで、様々な話題で会話が弾みました。



また、本年度より新たに健育会グループへ入職した9名の先生方から自己紹介を兼ねた挨拶が行われました。



竹川病院 金丸晶子医師



花川病院 小笠原 究医師



ねりま健育会病院 石居 真医師



ねりま健育会病院 米田優登医師





湘南慶育病院 猪股研太医師



湘南慶育病院 嶋 憲一医師



湘南慶育病院 岡本 真里愛医師



石川島記念病院 岩塚邦夫医師



石川島記念病院 高石幸人医師

最後に、湘南慶育病院の北川泰啓先生に、厳しい医療界を皆で力を合わせて乗り切っていこうという力強い激励の言葉をいただいた後、一本締めで賑やかに会は締めくくられました。



患者さんやそのご家族はもちろん、セラピストやナースも含めた医療チーム全体との信頼関係をしっかりと構築し「Our Team」での取り組みを行うよう、日々努めてください。